

り湛甘泉の講を聴き、又た詞章に汎濫し、至る所、朋友と與もに、登臨唱和して樂と爲す、衡州の守たりしとき、始て諸生と經を石鼓書院に窮む、而して趙大洲來遊し、又た之が爲に其識見を開拓す、江西の參政たりし以後は、親しく鄒東廓、羅念庵に證す、是に於て平生、甘泉に授かりし所、隨處體認天理の學、始て著落あり、蓋し白石の師は甘泉にして、友は則ち皆な陽明の門下なりき、著はす所、端居寢語あり、(明儒學案 卷四十一)

王敬所——王宗派、字は新甫、敬所と號す、台の臨海の人、嘉靖甲辰の進士、王元美と與もに詩社を爲す、七子中の一なり、官、刑部侍郎に至る、敬所、歐陽南野に師事す、少より佛老を窺ふ、謂へらく、良知なる者は天に在ては不已の命と爲り、人に在ては不息の體と爲る、即ち孔門の仁なり、學は以て其不息を求むるのみ、(明儒學案 卷十五)

趙大洲——趙貞吉、字は孟靜、大洲と號す、蜀の内江の人、嘉靖十一年進士の第に登る、官、南京禮部尙書に至る、著あり、内篇を經世通と曰ひ、外篇を出世通と曰ふ、論述する所、極て廣し、萬曆四年、三月卒す、年六十九、文肅と諡す、大洲の學は之を徐波石に得たり、大洲、禪を好み、謂へらく、禪は以て人を害するに足らず、僕蓋し身を以て之を證

す、世儒の徒に口説を以て、諍論するの比に非るなりと、故に王學の傳を承くると雖も、間、禪に流るゝの言あり、(明儒學案 卷三十三)

何克齋——何祥、克齋と號す、四川内江の人、官、郎中に至る、初め歐陽南野に大學に事ふ、趙大洲之に謂て曰く、南野の如きは汝當に贊を執て専ら拜して師と爲して可なりと、克齋其の言の如くす、南野笑つて曰く、予大學に官すれば、即ち師なり、何ぞ更に贊を以てせんと、克齋謂へらく、大學は生徒衆し、此に非んば、以て親切を見るに足らず、南野乃ち之を受く、凡そ南野、大洲の一言一動、必ず之を籍記し、以て學的と爲す、京師の講會に、識仁定性二篇を拈する者あり、克齋、講義を爲すに、皆な良知の旨を以て之を通ぜり、克齋の學は、大洲に出づると雖も、儒者の矩矱を失はざるなり、耿定方曰く、大洲の法語危言、人の沉痾を起す、克齋の溫辭粹論、人を輔くるの參苓なり、其人をして反求して、本心を自得せしむるは一なり、著には、何克齋講學通解、論學書あり、

(明儒學案 卷三十五)

張本靜——張啓、字は士儀、本靜と號す、涇縣の人、歐陽南野に従ひ、累年歸らず、繼て

鄒東廓錢緒山王龍溪に從ひ、歸て徒を聚め學を講ず、收斂精神を以て切要と爲し、對景磨瑩を以て實功と爲し、萬物一體を以て志願と爲す、意氣眉睫の間、能く人心を轉移す、(同卷三五)

貢受軒——貢安國、字は元略、受軒と號す、宣州の人、歐陽南野、王龍溪を師とし、水西同善の會を主る、後ち山東の州守に官し、學を志學書院に講ず、(同上)

沈古林——沈寵、字は思畏、古林と號す、宣城の人、官、廣西參議に至る、貢受軒に師事す、受軒は歐陽南野、王龍溪に學び、返て古林に謂て曰く、王門の學は南畿に在り、盍そ往て之に從はざると、是に於て古林は又、南野、龍溪を師とす、閩に在て養正書院を建て、蕪黃に在て崇正書院を建つ、羅近溪、開元の會を宣州に立て、古林、梅宛溪と與もに其の席を主る、疾革りしとき、其胸次如何と問ふものあり、曰く、已に物なしと、(同上)

萬思默——萬廷言、字は以忠、思默と號す、南昌の東溪の人、父、虞愷、刑部侍郎、業を陽明に受く、思默、官、提學僉事に至る、官を罷め、門を杜ること三十餘年、迹を匿くし、光を翳み、幾を研き、深を極む、念菴の學は思默を得て傳ふ、自ら爲學を叙して云ふ、一日、易

を石蓮洞に讀み、良、思不出位、に至り、悅として契證あり、念菴師に請ふ、師甚だ之を旨す、入仕の後ち交遊頗る廣く、聞見議論遂に雜なり、力淺く心浮び、漸く搖眩を爲す、動靜寂感の間を商度し、空覺有無の辨に參訂し、上下沉掉、擬議安排、幾ど二十年なるも未だ安からず、幸に山に還るを得て益、復た門を杜て靜攝し、自心を默識す、一種浮妄熱鬧の習心、忽爾として消ゆと、思默亦易に深し、謂へらく三百八十四爻、心體の流行に非るなし、爻象に著せず、又た爻象を離れず、頗る發明する所多し、(明儒學案卷二十一)

周謙齋——周坦、謙齋と號す、羅浮の人、仕て縣令と爲る、幼より聖賢の學に志あり、學を薛侃に受く、周遊して講席を司り、衰老猶ほ倦まず、其論學語に曰く、日之明也、必照於物、有、不照者、陰霾之蔽也、心之知也、必格乎物、有、不格者、物欲之蔽也、と、蓋し亦聖學を以て自ら任ずる者なり、(同卷三十)

王塘南——王時槐、字は子植、塘南と號す、吉の安福の人、嘉靖丁未の進士、官、太常卿に至る、萬曆乙巳十月卒す、年八十四、塘南弱冠にして同邑の劉兩峰に師事す、刻意學を爲し、仕て四方の學者に質し、未だ之を或は怠らず、終に敢て自ら以て得と爲さず、

五十官を罷め外務を屏絶し躬に反さふし體に密にす、是の如きこと三年、空寂の體に見るあり、又十年にして漸く生生真機、停息あることなく、念慮に従て起滅せざるを悟る、其の學は收斂よりして入り方さに能く微に入る、故に透性を以て宗と爲し、研幾を要と爲す、高忠憲曰く、塘南の學、八十年磨勘此に至る、心境を洞徹する者と謂つべし、(同卷三十)

陳蒙山

陳嘉謨、字は世顯、蒙山と號す、廬陵の人、嘉靖丁未の進士、官湖廣參政に至る、謂へらく、學未だ大に明かならず、機を息め世を忘るゝに非んば以て深造なしと、遂に休を乞ひ、萬曆癸卯年八十三にして、卒す、少にして書を西塔に讀み、劉兩峰に遇て即ち之に師事し、間、其説を以て塘南に語る、塘南、心動き亦往て之を師とす、一時同志、鄒光祖、敖宗濂、王時松、劉爾松の十有七人、共に兩峰の門に學ぶ、螺川の人士、始めて學あるを知るは蒙山之を倡へしなり、歸田の後、會を青原に爲し、塘南と與もに相印正し、士習の卑陋を慨き大に之を振作す、凡そ來て門に及ぶ者あれば蒙山必ず曰く、學は一家の私に非ず、塘南の在るあり、賢輩盖んぞ往て之を師とせざると、其人我

を忘るゝこと此の如し、(同卷三十一)

徐存齋

徐階、字は子升、存齋と號す、松江、華亭の人、嘉靖癸未の進士、官武英殿大學士兼吏部尙書に至る、卒する時、年八十一、太師を贈り、文貞と諡す、聶雙江、初め華亭に令たり、存齋業を其門に受く、故に名を王氏の學に得たり、政府に在るに及て、講會を靈濟宮に爲し、歐陽南野、聶雙江、程松溪をして之を分主せしむ、學徒雲集すること千人に至る、爾來未曾有の盛と爲す、丙辰以後諸儒或は歿し或は去り、講壇之が爲に一空、戊午何吉陽、南京より來り、復た存齋を推して主盟と爲し、猶ほ靈濟宮の會を爲す、存齋は頗る功を立てしと雖も機巧を以て事を用ふるを以て之を議するもの多し、王陽明全集に序する所を見るも存齋の守る所を知るべし、(同卷三五)

宋望之

宋儀望、字は望之、吉の永豐の人、官僉都御史に至る、卒年、六十五、望之、聶雙江に従學し、良知の旨を聞く、時方に陽明從祀の議起て議論、一に歸せず、因て或問を著し以て時人の惑を解けり、(同卷三四)

羅近溪

羅汝芳、字は惟德、近溪と號す、江西の南城の人、嘉靖三十二年の進士、官

參政に至る、萬曆五年、表を進め、學を廣慧寺に講ず、朝の士之に従ふ者多し、江陵之を惡む、給事中周良寅其事を劾したれども、畢く行はれず、潜に京師に住し、遂に致仕す、歸て門人と共に安城に赴き、劔江を下り、兩浙金陵に趨き、閩廣に往來し、益、此學を張皇す、至る所弟子座に滿ちしも、未曾て師席を以て自居らず、十六年九月卒す、年七十四、近溪少時に薛文清の語を讀みて、謂へらく、萬起萬滅の私、吾心を亂すと、久し、今當に一切決去し、以て吾澄然湛然の體を全うすべしと、志を決して之を行ふ、臨田寺に關を閉ぢ、水鏡を几上に置き、之に對して默坐し、心をして水鏡と二なからしむ、之を久うして、心火を病む、偶、僧寺に過ぎりて、心火を急救すと、榜する者あるを見る、以爲へらく、名醫ならんと、之を訪へば、則ち徒を聚めて學を講ずる者なり、近溪衆中に從ふて聽くこと良、久し、喜て曰く、此眞に能く吾が心火を救はんと、之を問へば、顏山農と爲す、近溪自ら其の心を生死得失の故に動さざるを述ぶ、山農曰く、是れ欲を制するのみ、仁を體するに非るなり、近溪曰く、己私を克ち去て天理に復す欲を制するに非んば、安ぞ能く仁を體せんと、山農曰く、子は孟子が四端を論ずるを觀ざるか、皆な

擴めて之を充たすを知らば、火の始めて燃ゆるが如く、泉の始めて達するが如しと、此の如く仁を體するは何等の直截ぞ、故に子は當下、日に用ひて知らざるを患へよ、妄りに天性生生の或は息むを疑ふこと勿れと、近溪時に大夢の醒め得たるが如し、明日五鼓即ち往て納拜して弟子と稱し、悉く其學を受く、山農、近溪に謂て曰く、此の後ち子の病は當に自ら癒ゆべく、舉業當に自ら工なるべく、科第當に自ら致すべし、然らざる者は吾弟子に非るなりと、已にして近溪病果して癒えぬ、其後ち山農事を以て、京獄に繫留せらる、近溪悉く田産を鬻きて之を脱す、獄中に侍養すること六年にして、廷試に赴かず、近溪は歸田の後ち身已に老いたり、山農至る、近溪左右を離れず、一茗一菓必ず親ら之を進む、諸孫以て勞すと爲す、近溪曰く、吾師は汝輩の能く事ふる所に非るなりと、楚人胡宗正は故と近溪の舉業の弟子なり、然れども其の易に得るあるを聞き、反て弟子と爲りて之に學び、遂に其旨を得たり、近溪十有五にして志を張洵水に定め、二十六にして學を山農に正し、三十四にして易を胡生に悟り、四十六にして道を泰山丈人に證し、七十にして、心を武夷先生に問へり、近溪は赤子、良

心、不學不慮を以て學的と爲し、天地萬物同體、形骸を徹し物我を忘るゝを以て大と爲す、謂へらく此理は生生息まず、把持を須ひず、接續を須ひず、當下に渾淪順適すと、工夫若し湊泊を得難ければ即ち湊泊を屑しとせざるを以て工夫と爲す、胸次茫として畔岸なければ即ち畔岸に依らざるを以て胸次と爲す、恰も纜を解き船を放ち風に順ひ棹を張るが如し、世の學者妄に澄然湛然を以て心の本體と爲し、胸膈に沈滞し景光を留戀する、是を鬼窟の活計と爲す、天明に非るなりと、蓋し近溪は兼て禪に精通せるなり、(三四卷)

周海門

周汝登、字は繼元、海門と號す、嵯縣の人、萬曆丁丑の進士官、南京尙寶司卿に至る、海門に従兄周夢秀あり、道を王龍溪に聞く、海門之に因て遂に學に向ふを知れり、已にして羅近溪を見る、七日啓請する所なし、偶、如何にして是れ善を擇て固く執るやと問ふ、近溪曰く、此善を擇ひ了て固く之を執る者なりと、此より便ち悟入あり、近溪嘗て法苑珠林を以て海門に示す、海門、一二葉を覽て言ふ所あらんと欲す、近溪之を止て且つ看去らしむ、海門竦然として背に鞭つが如し、故に海門、近溪の像

に供し、節日には必ず之に祭事して身を終ふ、南都の講會に海門、天泉證道一篇を拈て相發明す、許敬庵言ふ、無善無惡は宗と爲すべからずと、九誦を作て以て之を難ず、海門、九解を作て以て其説を伸て以爲へらく、善且つ無し、惡更に何より容らん、病なくんば、病を疑ふを須ひず、惡既に無し、善必ずしも再び立たず、頭上に以て頭を安んじ難し、本體は纖毫を著け得ず、著あれば便ち凝滞して化せずと、無善無惡の一言後人の議多し、顧涇陽、馮少墟、皆な無善無惡の言を以て陽明を排摘するも未だ陽明の旨を解せざるもの如し、海門の著は證學錄、四言教九解あり、(三六卷)

陶石簣

陶望齡、字は周望、石簣と號す、會稽の人、萬曆己丑進士、第三人、林編修を授けられ太子中允、右諭德、兼侍講に轉す、事に遇て敢爲死を怖れず、國子祭酒に任せられ未だ幾ならずして卒す、文簡と諡す、石簣の學は多く之を周海門に得て禪に出入す、以爲へらく明道陽明の佛氏に於ける陽に抑て陰に扶く、蓋し其彌、理に近き者を得て夫の毫釐の辨を究めざるなりと、恐くは是れ己を以て先賢を評する者ならん、(同上)

楊復所——楊起元、字は貞復、復所と號す、廣東、歸善の人、萬曆丁丑の進士、官、吏部侍郎に至る、卒年五十三、復所の父、傳、芬、湛、甘、泉の學に名あり、故に幼より薰染す、後ち羅近溪に京師に會し、遂に弟子と爲る、近溪既に歸る、復所歎して曰く、吾師且に老いとす、今若し其傳を盡さずんば終身の恨なりと、因て從姑山房に訪て業を卒ふ、復所至る所學を以て人を淑す、其大旨に謂ふ、明德の本體は人人の同き所、其氣稟、之を拘し得ず、物欲之を蔽ふ、工夫なきを得ず、做すべきは只自ら之を識るを要するのみ、復所の近溪に事る、出入必ず以て其像に供養し、事あれば必ず告て而後に行ふ、顧涇陽曰く、羅近溪は顏山農を以て聖人と爲し、楊復所は羅近溪を以て聖人と爲す、其感應の妙、錙銖爽はざることを此の如し、(同卷三四)

胡廬山——胡直、字は正甫、廬山と號す、吉の泰和の人、嘉靖丙辰の進士、官、福建按察使に至る、萬曆乙酉、五月卒す、年六十九、廬山少にして駘蕩、好て古文詞を好み、年二十六、始て歐陽文莊に從て問學す、即ち語るに道藝の辨を以てす、廬山、疾惡甚だ嚴なり、文莊曰く、人孰か好惡せざらん、人胡を以てか能く好し能く惡む、之を仁に歸すれば

なり、蓋し其本心を得ざれば則ち好惡却て累す所と爲る、一切忿忿不平、是れ先づ已に仁體を失て惡に墮つ、廬山之を聞て慙然として背に汗す、年三十、羅念庵に從學す、念庵教ふるに靜坐を以てす、其の蜀に入るに及て、念庵之に謂て曰く、正甫の言ふ所は見なり、實に非るなり、朝より暮に至り、漫せず執せず、一刻の暇なくして時々體を觀る、是を之れ實と謂ふ、知、餘ありて行、足らず、常に中に歎あるが若にして絲毫盡さざる是を之れ見と謂ふ、蜀に歸て以後、廬山の淺深は念庵も見るに及ばず、廬山、書を著はし、専ら學的大意を明かにす、謂へらく、理は心に在て、天地萬物に在らずと、陽明の旨を疏通せり、(同卷三十二)

姚鳳麓——姚汝循、字は叙卿、鳳麓と號す、南京の人、嘉靖丙辰の進士、官、嘉定知州に終ふ、羅近溪嘗て明德の學を論ず、鳳麓、日の説を舉て云ふ、德は猶ほ鑑の如し、翳に非んば昏からず、磨に非んば明かならずと、近溪笑て曰く、明德は體なし、喻の及ぶ所にあらず、且つ公一人のみ、鑑と爲り翳と爲り復た磨者と爲る、可ならんかと、之を聞て遂に省あり、浸く悟入せり、妄子あり、陽明を以て詬病と爲す、鳳麓曰く、何の病ぞ、曰く

其の良知の説を惡む、曰く世、聖人を以て天授にして學ぶべからずと爲すこと久し、良知の説出て、より乃ち人々之を固有するを知る、即ち庸夫小童も皆な反求し以て道に入るべし、此れ萬世の功なり、子曷ぞ病んと、(同卷二五)

鄧潛谷

鄧元錫、字は汝極、潛谷と號す、江西、南城の人、羅近溪の講學を聞き之に従て遊ぶ、繼て吉州に往き諸老先生に謁して此學を明にせんことを求む、鄒東廓、劉三五に就學して其の要旨を得たり、家に居り著述して五經釋、兩史を成す、徵されて官に赴かんとして墓に辭し、墓所に卒す、年六十六、時に萬曆壬辰七月なり、(同卷二四)

唐一菴

唐樞、字は惟中、一庵と號す、湖の歸安の人、嘉靖丙戌の進士、刑部主事に除せられ、疏して李福達を論じ罷められて歸り、講學著書、幾と四十年、初め湛甘泉に師事し、其後、陽明の學を慕て見ゆるに及ばず、故に甘泉の隨處體認天理、陽明の致良知に於て兩存して之を精究し、卒に討真心の三字を標して、的と爲す、夫れ真心と曰ふ者は、即ち虞廷の所謂道心なり、討と曰ふ者は學問、思辨行の功、即ち虞廷の所謂精一なり、隨處體認天理、其旨該ねたり、而も學者或は反身尋討に昧く、致良知は其の幾

約なり、而も學者或は直任靈明に失す、此れ討真心の言、已を得ずして立つ、苟も真心の我に在て不二不雜なるを明し得ば、王湛兩家の學俱に弊なし、然れば真心は即ち良知なり、討は即ち致なり、王學に於て尤も近し、唯良知は自然の體と爲し、其自然なる者に從て之を致せば、則ち工夫は本體の後に在り、猶ほ程子の誠敬を以て之を存するが如し、真心物欲見聞の中に蔽はれ、從て之を討せば、則ち工夫は本體の先に在り、猶ほ程子の識仁の如し、著には禮言剩語、三一測、真談、景行館論、雜著、一菴語錄あり、(同卷四十)

許敬菴

許孚遠、字は孟仲、敬菴、湖の德清の人、嘉靖壬辰の進士、官、南京兵部右侍郎に至る、萬曆二十二年卒す、敬菴少時諸生と爲り、竊に古聖賢の爲人を慕ひ、鄉黨の士と與もに相争逐するを羞づ、年二十四、郷に薦められ、退て唐一菴の門に學ぶ、年二十八、禍を釋て進士と爲り、四方の知學者と與もに遊ぶ、始め反身尋究を以て功と爲す、家に居ること三載、困窮艱厄、怳忽として略、悟る所あり、蘭溪を過るに及て徐魯源謂ふ、其の言動尙ほ繁處あり、這裡凝重少し、便ち道と與もに相應せず、敬菴頂門鍼を

受け水を指して自ら誓ふ、故に敬菴の學は克己を以て要と爲す、深く良知を信ずれども夫の良知を援て以て佛に入る者を惡む、嘗て羅近溪を戒て曰く、公は後生の標準と爲り、二三輕浮の徒をして恣に荒唐にして忌憚なきの說を爲し以て人聽を惑亂せしめ、守正好修の士をして、搖首閉目、此學を拒て之を信ぜざらしむ、其の故を思はざるべけんやと、南都講學、敬菴、楊復所、周海門と與もに主盟と爲る、周楊は皆な近溪の門人、持論同からず、海門は無善無惡を以て宗と爲し、敬菴は九諦を作て以て之を難じて言ふ、陽明の宗旨は元と聖門と異ならず、故に云ふ、性不善なし、故に知、良ならざるはなし、良知即ち是れ未發の中なりと、此れ其の立論至て明晰と爲す、無善無惡は心の體の一語は蓋し其の未發廓然寂然なる者を指して之を言ふ、祇だ一の靜の字を形容し得て下の三言は始て無病と爲すべし、今心意知物を以て俱に善惡言ふべきものなしとするは陽明の正傳に非るなりと、時に萬曆二十年にして、前後諸名公畢く集り、講學甚だ盛なり、兩家の門下互に口語あり、敬菴も亦是を以て官を解けり、(同卷一)

羅匡湖

羅大紘、字は公廓、匡湖と號す、吉の安福の人、萬曆丙戌の進士、官、禮科給事中に至る、匡湖、徐魯源に學ぶ、林下に南阜と與もに學を講ず、南阜謂ふ、匡湖、敏にして善く入る、衆人の却步躊躇四顧する所は匡湖、提刀直入し、衆人、數年を経て始て入る者、匡湖、其奥に闖す、然れども其の得る所を觀るに、(同卷三) 破除點照す、

劉瀘瀘

劉元卿、字は調父、瀘瀘と號す、吉の安福の人、郷舉仕へず、徵して禮部主事と爲す、初め瀘瀘、青原に遊び、事に感じて遂に憤排の志あり、歸て先儒の語録を考索し、未だ之を得るあらず、乃ち學を劉三五に受け、又進て蘭溪の徐魯源、黃安の耿天臺に遊學す、天臺の生生已むべからざるの旨を聞き、欣然として自信して曰く、孟子曰はずや、四端之を充せば四海を保んに足る、吾方さに幸に泉流れず、故らに之を遏む、火燃えず、故らに之を滅す、彼の滅と遏とは二氏の流、吾れ忍びざる所なりと、

(同卷二)

馮少墟

馮從吾、字は仲好、少墟と號す、陝の長安の人、萬曆己丑の進士、御史と爲り、疏して朝講を請ふ、上怒て之を杖せんと欲せしも、長秋節を以て免を得たり、後ち

家居講學する者十餘年、天啓の初め副都御史と爲り、鄒南阜と風期相許し、首善書院を京師に立て、正學を倡明す。南阜は解悟を主とし、少墟は工夫を重んじ、相鹽梅可否を爲す。上疏して講學の要を論ず。其の末に曰く、先臣王守仁は兵戈倥傯の際に當て講學を廢せず、卒に能く功を成す。此れ臣等の毀譽を恤へず、得失を恤へずして之を爲す所以なりと、遂に屢疏して休を乞ふ。又二年にして家に即て工部尙書に拜して卒す。恭定と謚す。少墟は學を許敬菴に受く、故に其の爲學は全く本原の處に透徹し、未發の處に力を得て日用常行に於て却て事事點簡し、以て其本體に合するを求む、是れ靜にして存養し、動て省察するの說と與もに二あることなし。(同卷一)

唐荆川——唐順之、字は應德、荆川と號す。武進の人、官、僉都御史に至る。萬曆庚申四月卒す。年五十四。頗る文を能す。其の著述の大なる者を五編と爲す。儒編左編、右編、文編、稗編、是なり。之を唐荆川全集に收む。荆川の學、之を王龍溪に得し者を多と爲す。謂へらく、此心天機活物、自寂自感、人力を容れず。吾惟此の天機に順ふのみ、天機を障ふる者は欲に如くはなし。欲根洗淨せば機握らずして自ら運らんと。(同卷二)

唐凝菴——唐鶴徵、字は元卿、凝菴と號す。荆川の子なり。官、南京太常に至る。萬曆己未、年八十二にして卒す。凝菴始め意氣を尙び、之に繼くに園林絲竹を以てし、而後に

泊然之を道術に歸す。其の道術、九流百氏、天文地理、稗官野史も究極せざるなし。而して繼て之を莊子逍遙遊、齊物論に歸し、又繼て之を湖南の求仁、濂溪の尋樂に歸して、後に恍然として乾元爲す所、天地を生じ、人物を生じ、一を生じ、萬を生じ、生生已まざるの理を悟る。眞に太和奧窔なり。物欲排せずして自ら調ひ、世情除かずして自ら盡く、聰明才伎の昭灼、旁蹊曲徑の奔馳、收攝せずして瑩然として有るなし。(同卷二)

姜廷善——姜寶、字は廷善、丹陽の人、官、南京禮部尙書に至る。業を唐荆川の門に受く。(明儒學案卷二十五)

萬鹿園——萬表、字は民望、鹿園と號す。寧波の人、官、南京中軍都督府僉事に至る。嘉靖丙辰正月卒す。年五十九。鹿園漕運の事に功を立て、又た軍事に就て籌畫する所あり。鹿園の學は多く之を王龍溪、羅念菴、錢緒山、唐荆川に得て禪學に究竟す。其時東南講會甚だ盛なり。鹿園、干與を喜はず、以爲へらく、此輩未だ曾て心を發すること道の

爲にせず、門戸に依傍するに過ぎず、終日之と與もに言ふと雖も徒に精神を費す、彼此何ぞ益せん、と鹿園嘗て言ふ、聖賢切要の工夫は格物より先なるはなし、蓋し吾心本來具足す、格物とは吾心の物を格するなり、情欲意見の爲に蔽はれて、本體始て晦し、必ず一切を掃蕩して獨り吾心を觀る、之を格して又た格し愈、研て愈精し、本體の物始て呈露するを得ん、是を格物と爲す、物を格せば則ち知自ら致すべしと、(同卷十五)

殷秋溟——殷邁字は時訓、秋溟と號す、留守衛の人、官禮部侍郎に至る、何善山と與もに遊び、緒言を與り聞く、著はす所、懲忿窒欲篇あり、(同卷二五)

耿天臺——耿定向、字は在倫、天臺と號す、楚の黃安の人、嘉靖丙辰の進士、官、戸部尙書に至る、告歸家居する七年にして卒す、年七十三、太子少保を贈り恭簡と謚す、天臺の學は玄遠を尙ばず、中行を以て主と爲す、李卓吾、狂禪を鼓吹し、學者靡然として風に従ふ、故に天臺は毎々實地を以て主と爲し、苦口匡救す、然も又禪學に拖泥帶水し、半信半疑終に以て卓吾を壓服することなし、故に天臺が良知を認むるも亦未だ純ならざるものあり、故に論者却て天臺を謂て良知の學を毀る者と爲せり、(同卷三五)

管東溟——管志道、字は登之、東溟と號す、蘇の太倉の人、隆慶辛未の進士、官、刑部主事に至る、萬曆戊申卒す、年七十三、東溟業を耿天臺に受く、書數十萬言を著はす、大抵儒釋を鳩合す、浩瀚にして方物すべからず、(同卷十二)

耿楚侗——耿定理、字は子庸、楚侗と號す、天臺の仲弟なり、少時感ずる所あり、一室に靜坐して終歲出でず、或は友を求め道を訪ひ累月歸を忘る、其始は方湛一に事へ、(方與時、字は湛一、黃陂の人、太和山に入て、攝心術を習ふ、又黃白術を治む、王龍溪、羅念菴に遇ふ皆な目して奇士と爲す)最後に鄧豁渠に於て一切平實の旨を得て能く視を收め聽を返へす、何心隱に於て黒漆無入無門の旨を得、充然として自足す、楚侗の學を論ずるや言説を煩はさず、當機指點し人をして豁然たらしむ、李卓吾、談説を好む、楚侗、一言を發せず、別に臨み之に謂て曰く、如何ぞ是れ自ら以て是と爲す、堯舜の道に入るべからずと、卓吾默然たり、(同卷三五)

潘雪松——潘士漢、字は去華、雪松と號す、徽の婺源の人、萬曆癸未の進士、官、尙寶司少卿に至て卒す、年六十四、雪松は耿天臺、李卓吾に學ぶ、一日長安街、馬上忽ち省て曰

く、原來只是れ是の如し、何ぞ更に索馳するを須ひんと、之を祝延之に質す、延之曰く、是に近し、曰く戒慎恐懼、如何か功を用ふる、曰く此を識らば渠れ自ら戒慎を會し自ら恐懼を會せんと、相與もに掌を撫す、已にして相戒めて曰く、此念最も墮落し易し、須く時時提醒醞釀、日に深かるべし、庶くは進歩あらん、京を出るとき天臺に別る、天臺曰く、准に至らば王敬所に謁せよ、安豊に入らば王東崖を訪へ、此老頗る奇なり、即し戲語するも亦須く記すべし、金陵に過らば再び焦弱侯を叩け、只此れ便ち是れ博學の先生なりと、一一教の如くし、始て宇宙の無窮なることを覺れり、(上同)

方本菴——方學漸、字は達卿、本菴と號す、桐城の人、少より學を嗜み長して彌、敦く、老て懈らず、一言一動、一切歸て之を心に證す、世の心を談ずる者、往々、無善無惡を以て宗と爲すを見て憂ふるあり、進て之を古に證す、古今の心に關する言を摘み、各數語を拈り以て不觀不聞の中に莫見莫顯なる者あるを見て、以爲へらく萬象の主は空然無一物に非るなりと、本菴は學を張甌山、耿楚侗に受け、秦州一派に在て別に一機軸を出せり、然れども其の心體を談ずる未だ瑩ならざるものあり、(上同)

尤西川——尤時熙、字は季美、西川と號す、河南洛陽の人、官、戶部主事に至る、終に養歸す、歸て三十餘年、萬曆庚辰九月卒す、年七十八、西川、傳習錄を讀むに因て始て聖人は學て至るべきことを信ず、然れども學師なければ終に成ることある能はず、是に於て劉晴川に師事す、晴川事を言て獄に下る、西川時に疑ふ所を書し獄中に從て之を質す、又た朱近齋、周訥溪、黃德良(名)に從て陽明の言行を考究し、尋常警效と雖も亦必ず籍記す、(明儒學案卷二十九)

孟我疆——孟秋、字は子成、我疆と號す、山東在平の人、隆慶辛未の進士、官、尙寶寺丞、少卿に至る、卒年六十五、初邑人張宏山の學を講ずるを聞き、往て之に從へり、尙書の明目達聰の語に因て灑然として悟あり、鄒聚所、周訥溪、其地に官し、相與もに印證す、至る所唯だ良知を發明し、明儒經翼を改定して其の駁雜なる者を去る、時に唐仁卿、心學を喜ばず、我疆、顧涇陽に謂て曰く、仁卿は何如なる人ぞ、涇陽曰く、君子なり、我疆曰く、彼は陽明を排す、焉ぞ君子たるを得ん、涇陽曰く、朱子は象山を以て告子と爲し、文成は朱子を以て楊墨と爲す、皆な甚辭なり、何ぞ但仁卿のみならんと、我疆終に以

て然と爲さず許敬菴嘗て我疆を盈大の地に訪ふ瓦屋數椽其の菜舎之に倍す敬庵謂へらく此風味は大江以南未だあらざる所なりと(上同)

孟雲浦——孟化鯉字は叔龍雲浦と號す河南新安の人官稽勳文選郎中に至る西川既に劉晴川の學を傳ふ雲浦因て往て之を師とす凡そ言ふ所の發動の處に功を用ふるの説及集義は心の安んずる所に即くの説皆な師傅なり都下に孟我疆と相砥礪し舍を聯て寓す公事の暇には輒ち徒步過從し飲食起居同くせざる者なし時人稱して二孟と爲す張陽和二孟歌を作て之を記す官を罷て家居するや中丞張仁軒之に餽りしも亦受けず書問都て絶つ其地に宦する者も之を踪跡せんと欲して得ざるなり(上同)

薛畏齋——薛甲字は應登畏齋と號す江陰の人嘉靖乙丑の進士官四川贛州僉事副使に至る畏齋篤く陸象山王陽明の學を信ず嘗て曰く古今の學術は陽明に至て漸次昭融す天年を假さず此公をして縷析條分し以て訓話の惑を破らしむる能はず是を以て學者略領悟を知ると雖之に入るに従ふべきなし區々自ら量らす妄意

其缺を補はんと欲し聞く所を會集して一書を成し名を心學淵源と曰ふ冀くは之を來世に傳て以て知者を俟たんと(明儒學案卷二十五)

劉冲倩——劉塙字は靜主冲倩と號す會稽の人賦性任俠慨然として四方の志あり至る所師を尋ね友を問ひ意氣を以て相激發し人争て之に歸附す時に周海門許敬庵楊復所學を南都に講ず冲倩之に與かる周楊二氏の學術は同く近溪に出づ敬庵は則ち異同あり無善無惡の説は許氏は九誦を作り周氏は九解を作る冲倩は兩家を合て之を刻し以て一に歸するを求む而して海門の冲倩に契るや特に甚し曰く吾れ冲倩を得て孤ならずと教を受くること兩年未だ弟子と稱せず一日指點機に投ず冲倩曰く尙ほ此の一拜を少くを覺ゆ海門即ち起立して曰く足下の意は眞に時輩に比するに同からず冲倩下拜す海門曰く吾れ足下に期する者遠し答拜すべからずと冲倩會稽に歸るに及て授るに六字を以てす曰く萬金一諾珍重冲倩報ずるに一詩を以てす一時理學に名ある者鄒南阜李儲山曹眞子焦弱侯等參請せざるなし識解も亦日に進む海門越中に主盟たり冲倩之を助け後進を接引す海門の

學を學ぶ者甚だ衆くして入室を以て冲倩を推す、然れども流俗之を疾むこと讐の如し、亦信心を以て自得し、防檢を加へず、其學以て之を致すあるなり、著には證記あり(同卷三六)

焦澹園

焦竑、字は弱侯、澹園と號す、南京旗手衛の人、萬曆己丑の進士、官、南京司業に至る、藏書數萬卷、之を覽て略遍し、金陵は人士輻輳の地、澹園、壇坫を主持し、水の壑に赴くが如し、其理學を以て倡率するは、王弼州も如かざる所なり、泰昌元年卒す、年八十一、文端と諡す、澹園、耿天臺、羅近溪に師事し、又た篤く李卓吾の學を信じ、以爲へらく、未だ必しも是れ聖人ならず、一の狂字を肩にして聖人の第二席に坐すべしと、故に佛學を以て即ち聖學と爲し、程明道、關佛の語は皆な一一之を緝けたり、老莊翼等の著あり(同卷三五)

楊晉菴

楊東明、晉庵と號す、河南虞城の人、萬曆庚辰の進士、官、刑部侍郎に至る、天啓甲子卒す、年七十七、晉庵の與もに問辨せし所の者は、鄒南阜、馮少墟、呂新吾、孟我疆、耿天臺、張陽和、楊復所、諸人なるが故に能く陽明の肯綮を得たり、家居するも凡そ

民間の利病あれば身を以て任せざるはなし、嘗て曰く、身に顯晦あり、道に窮達なし、還て窮すれば則ち獨り其身を善するの言の未だ盡さるる所あるを覺ゆと、其學の要領は氣質の外に性なしと論するに在り(明儒學案卷二十九)

張宏山

張後覺、字は志仁、宏山と號す、山東茌平の人、仕て、華陰教諭に終ふ、蚤歳業を顔中溪、徐波石に受く、深思力踐、洞明礙なし、猶ほ友を取るの未だ廣からざるを以て、南は會を香山に結び、西は會を丁塊に結び、北は會を大雲に結び、東は會を王遇に結ぶ、齊魯の間、遂に學者多し、近溪、穎泉、東都に官し、宏山の爲に兩書院を建つ、願學と曰ひ、見大と曰ふ、宏山、水西講席の盛を聞き、就て其の學ぶ所を證す、萬曆戊寅七月卒す、年七十六(同上)

鹿乾岳

鹿善繼、字は伯順、乾岳と號す、北の定興の人、萬曆癸丑の進士、官、太常寺少卿に至る、後ち國難に徇す、大理寺卿を贈り、忠節と諡す、乾岳傳習錄を讀て、此の心の隔礙なきを覺ゆ、故に人、其の何れより授受する所ありやと問へば曰く、即ち之を陽明に得たりと謂て可ならんと、乾岳、孫奇逢と友と爲り、交を楊忠愍の祠下に定む、

皆な慨然として殺身不悔の志あり、首善書院の會に乾岳將に入らんとし、其相戒て朝政を言はず、職掌を談ぜざるを聞て曰く、職掌を離て學を言へば則ち無用の物と爲る、聖賢は無用の人なしと、遂に往かず、是故に乾岳の學は頗る東林諸子に近し、一も擾和夾雜なし、其れ斯れ之を狂狷と謂ふか、(同卷五四)

鄒南阜——鄒元標、字は爾瞻、南阜と號す、豫の吉水の人なり、萬曆丁丑の進士官、左都御史に至る、首善書院を建て、副都御史馮恭定と與もに學を講ず、群小之を難ずれども廢せず、上疏して之を辨ぜり、終に疏して、歸を乞ひ未だ幾ならずして卒す、太子太保を贈り、忠介と諡す、南阜の學は鄧定宇の提醒に頼て正路に入れり、其の要は心體を識るを以て入手と爲し、恕を人倫事物の間に行ひ、愚夫愚婦と體を同くするを以て工夫と爲し、意を起さず、空々たるを以て極致と爲し、達道を離て所謂大本なく、和を離て所謂中なしとす、故に南阜は禪を諱まず、然れども其言行は尙ほ儒の規矩を失はざりしなり、南阜には會語、講義、文集等あり、其の旨に曰く、知を除きて獨なく、自知を除きて慎獨なし、又曰く、五倫は是れ眞性命、詞氣は是れ眞涵養、家庭は是れ

眞政事、寢室は就ち是れ明堂なりと、其所論率ね此類なり、(同卷十三)

劉念臺

劉宗周、字は起東、紹興の山陰の人、念臺又蕺山と號す、萬曆辛丑の進士、

嘗て許孚遠に就て爲學の要を叩く、告ぐるに天理を存し人欲を遏むるを以てす、遂に謹て之を識るし敢て忘るゝことなし、甲辰に行人を授けらる、歸養し外難に丁り、讀禮の餘暇、唯だ明理見性を以て事と爲す、一日、劉永澄は武林に至て互に學ぶ所を正す、乃ち與もに仁を求むるの旨を決し、主靜の説を析ち修悟の異同を辨ず、永澄爽然として失ふことあるが如くにして去る、壬子、官に起る、道に高攀龍に謁し相與もに講論す、復た問學の三種あり、皆な儒宗の要言なり、旋て病を告ぐ、其後屢時事を言ひ、旨あり籍を削られて家に居り、心を性理學に潛む、嘗て高攀龍と質疑問斷なし、而て半日靜坐、半日讀書を以て奉じて、準的と爲す、崇禎の初め、順天府尹と爲る、直諫を以て斥けらる、門を閉て靜坐して一客に見えず、其門人群て教を請ふ、已むを得ずして、陶石簣の祠に過りて、紳儒を集めて會講す、伊洛主敬の學を以て衆を宣明して、慎獨の要に於て尤も謹を加ふ、後ち蕺山書院を啓く、從遊する者千人に及ぶ、述ぶる

所の人譜を梓し以て學者に授く、朱子の致知と陽明の致知との辨あり、福王立て、吏部左侍郎と爲り南都に至り疏して國を誤るの諸臣を誅せんと請ふ、又た表して親征を勧め併て四鎮准撫戰守に宜を失ふの罪を劾し、宰相の意に違ふあり、遂に逐はる、弘光乙酉六月山居して變を聞き絶食二十日にして卒す、其著には劉子全書四十卷あり、劉念臺は明末の忠臣なり、其の學も亦た身心の學にして慎獨を以て主旨と爲す、抑も其の學統最初は程朱學より入りたるが如くなれども其歸は實に王學なりとす、而して王學の末流多くは高虛に馳せて事功少かりしも念臺に至ては學術と事功共に觀るべきものあり、故に余輩は念臺を稱して王學の中興と爲す、惟ふに慎獨の二字は既に大學及び中庸にも見えれば必しも念臺の創唱にあらざれども之を提起して其の根本教義と爲したるは念臺の功なりと謂ふべし、慎獨の要旨大略左の如し

天地の間に盈つるは皆な氣なり、其人心に在るや一氣の流行、誠に通じ誠に復し、自然に分れて喜怒哀樂と爲る、仁義禮智の名は此に因て起る者なり、安排品節を待た

ず、自ら能く其の則を過たざるは、即ち中和なり、此れ生れながらにして之を有す、人は是の如し之を性善と謂ふ所以なり、即ち過不及の差なからず、而も性體は原と自ら周流して其の中和の徳たるに害あらず、學者は但、性體を證得し分明にして時を以て之を保つ、即ち是れ慎なり、慎の工夫は只だ主宰の上に在り、主あるを覺ゆ是れを意と曰ふ、意根を離るゝこと一步ならば便ち是れ妄なり、即ち獨にあらず、故に愈收歛せば是れ愈、推致す、然れども主宰も亦た一處の停頓あるに非ず、即ち此の流行の中に在り、故に曰く、逝く者は斯くの如きか晝夜を舍めずと

蓋し慎獨の意義は極て微妙なり、獨は陰屏間居幽處の意味のみにあらず、一念萌起他人未だ知らずして獨り知るの處も亦た是れ獨なり、故に獨は内外、精粗の意味を兼ねたり、念臺嘗て朱子の説を評して曰く

朱子は獨の字に於て一の知の字を下補す、前聖未だ發せざる所を擴むと謂つべし、然れども専ら以て之を動念の邊の事に屬するは何ぞや、豈に靜中に知なからんや、知をして動靜に間あらしめば則ち之を知と謂ふを得ずと

念臺の慎獨は陽明良知說より發明せるが故に獨知一點を戒慎するを以て主眼と爲せり、尙ほ左の證人要旨の一節を見て立教の主意を了解せらるべし

「學以て人たるを學ぶときは則ち必ず其人たる所以を證す、其の人たる所以を證するは其の心たる所以を證するのみ、昔し孔門相傳の心法より一も則ち慎獨と曰ひ、再も則ち慎獨と曰ふ、夫れ人心は獨體なり、即ち天命の性にして性に率ふの道の從て出づる所なり、獨を慎て中和位育し天下の能事畢る、然れども獨體は至微なり、安んぞ慎を容るゝ所ぞや、唯だ一獨處の時、下手法を爲すべきあり、小人に在りては仍ほ之を間居と謂ひ不善を爲して至らざる所なし、捨著無益の時に念及するに至ては已に其爽然自失を覺えず、君子曰く、間居の地は懼るべくして轉圖るべし、此時一念未だ起らず止だ一真无妄、不睹不聞の地に在るあり、吾が自欺を容るゝ所なし、吾も亦た之を自ら欺くなきのみなれば則ち一善不立の中と雖も已に具て渾然至善の極あり、君子は必ず其の獨を慎むを爲す所なり、夫れ一間居のみ、小人之を得て、萬惡の淵藪と爲し、君子は善く之に反す、即ち是れ證性の路なり、蓋し敬と肆との分な

り、敬と肆との分は人と禽との辨なり、此れ證人の第一義なり」と尙ほ念臺は慎獨を基本として許多の條目を立てて以て所謂證人の學案を爲せり、且又念臺の人極圖は周子の太極圖に摸擬せるもの、人極圖説は其の太極圖説及び易より來れるものなり、蓋し周子は宇宙より説き起して道德に及ぼし、劉子は人性に就て説を爲せるものなれども其の説は證人要旨と聯絡したれば極て繁冗と爲れり、人極圖説は無善にして至善なるは心の體なり、之を繼ぐ者は善なり、之を爲す者は性なり、是に繇て之を天下に達する者は道なりと曰ひ、人性の至善にして萬善皆な之れより出づることを説き、慎獨の功夫に依て不善を防遏すべきを示せり、尙ほ念臺の良知論四言教論の如きは大に觀るべきものあれども、今は唯其の特種の標榜のみを示すに止めたり、(劉子全書明儒學案卷六十三)

黄榕壇——黄道周、字は幼元、石齋と號す、又た榕壇と號す、福の鎮海衛の人、天啓壬戌の進士、官に在て直諫を以て罪を得たり、戊寅、少詹事に進み、翰林院侍讀學士を兼ね、上、經筵に御し、保舉、考選、孰か人を得ると爲すやを問ふ、石齋對ふ、人を樹るは禾を

樹るが如し、須く之を養ふこと數十年始て任用に堪ふべしと、石齋才學ありと雖も、蹇諤の故を以て當路者に悦ばれず、大に其志を爲すを得ず、丙戌三月卒す、年六十二、忠烈と證す、石齋深く宋儒氣質の性の非を辨じ、謂へらく氣に清濁あり、質に敏鈍あり、自らは是れ氣質なり、何ぞ性上の事に關せんや、性は即ち通天徹地、只此れ一物なり、動の極處に於て不動を見、不觀不聞の處に於て睹聞を見、纖毫の氣質を著け得ずと、石齋は王學を發揮するに力めずと雖も、其の時事を憤慨して活動せしが如きは、大に仰企すべき所なり、故に明末の王學を稱する者は必ず劉念臺と石齋とを擧ぐ、彭南昞最も明の七子を尊崇す、七子とは陳白沙、王陽明、鄒東廓、羅念庵、高梁谿、劉念臺、黃榕壇なり、而して陽明を以て三不朽を兼ねる者とせり、(明儒學案 卷五十六)

以上に列記せし諸子は明代の人なり

以下に列記する諸子は清代の人なり

黃梨洲

黃宗義、字は太冲、梨洲又は南雷の號あり、越の餘姚の人、父は尊素、明の忠臣なり、梨洲も亦父の志を紹て國事に奔走す、是時山陰の劉念臺道を蕺山に唱ふ、

父の遺命を以て之に従て遊ぶ、而かも越中は周海門の緒を承け儒を援て釋に入る之が魁たる者は石梁、陶夷齡あり、狂瀾衆を鼓し陽明學の緒、幾ど是に於て壞れんとす、念臺之を憂へて未だ以て計を爲すあらず、梨洲年尚ほ少し、奮ひ起て曰く、是れ何の言ぞやと、乃ち吳越の高材六十餘人と共に講席に侍し、力て其説を推す、故に蕺山の弟子、都御史祁彪佳、給事中章正宸諸氏の如き皆な名徳を以て重んぜらる、禦侮の助、梨洲に如くはなし、蕺山の學専ら心性を言ひ、黃道周は則ち象數を兼ね、當時之を宋の程邵兩家に擬せり、梨洲曰く、是れ開物成務の學なりと、乃ち其の治る所の律曆諸説を出して相疏證し、亦多く謀らずして合す、一時耆宿其名を聞て競て之を延致す、二弟宗炎、宗會あり、竝に異才を負ふ、自ら之を教へ數年ならずして皆な大に名を顯はす、是に於て儒林中、東湖三黃の目あり、是より後、志士を糾合し、義兵を擧て清兵を禦ぎ、萬死を出て、一生を得たり、其後ち從學者既に多く、康熙六年復た證人書院の會を越中に擧げ、以て劉蕺山の餘緒を申ぶ、復た四方の講席を主る、朝廷屢召せども遂に仕へず、左都御史魏象樞曰く、吾平生見んことを願て得ざる者三人、孫夏峰、黃

黎洲李二曲なりと、三十四年秋卒す、年八十有六、著はす所、明儒學案、南雷文定、其他頗る多し、宋元學案も亦黎洲之が緒を爲し、嗣子百家等之を助成せるものなり、念臺の學は慎獨を以て宗と爲す、黎洲之を守て失ふことなく、實用活動を主として、空疎無用の談を爲さず、蓋し陽明學の精神を得て之を時勢に發表せし者と謂つべきなり、

(國朝先正事略卷二十七)

李二曲——李頤(或は容と爲す)字は中孚、二曲と號す、又た自ら二曲土室病夫と署す、西安の熬屋の人、家貧にして書に乏く人に從て之を借り、經史子集より佛老二氏の書に至るまで通觀せざるなし、康熙九年南遊して道南書院に入り、顧憲成、高攀龍、諸子の遺書を發し、且つ東林學者の爲に書を講ず、聽者雲集す、二曲又た講を無錫、江陰及び靖江に開き、少しも休息を得ず、後ち屢徴さるれども皆な病を以て辭せり、扉を制して之を鎖し、遂に復た人と接せず、舊生徒と雖も亦た見ること罕なり、唯顧炎武至れば則ち之を款待す、聖祖西巡せしとき、關中大儒の四字を賜て之を寵せらる、四十歳の頃、十三經糾謬、二十一史糾謬の諸書を著はし、又象數の學に至るまで撰述する所

あり、二曲は極博にして近省、口耳の學は復た人に示さず、嘗て門人に謂て曰く、授受の精微は書に在らず、要は自得に在るのみと、常に反身録を以て學者に示せり、是時に當て北方には則ち孫夏峰、南方には則ち黃梨州、西方には則ち二曲、世人稱して三大儒と爲す、二曲は早とに父母を喪ひ、自ら飢寒清苦の中に振ひ道を守ること愈、嚴にして能く關中の學を六百年の後に接し、毅然として獨立し、毫も憑倚する所なし、二曲の學系に就ては異論なきにあらず、或は陸王派と爲し、或は程朱派と爲す、今は前者の説を取る、(上同)

孫夏峰——孫奇逢、字は啓泰、鍾元と號す、又た夏峰の號あり、直隸容城の人、天性至孝、萬曆二十八年、年十七、鄉試に擧げらる、又た氣節の士と交を訂し、國士を以て稱せらる、後ち屢徴さるれども皆な應ぜず、天下稱して孫徵君と爲す、家を共城に移し、兼山堂を開き、易を其間に講じ、耕稼自ら給す、終に山林の操を改めず、常に念ふ聖學は久く湮ぶと慨然として往を紹き來を開くを以て己が任と爲す、鹿伯順と友とし、善く、聖賢を以て相期し、口耳章句の學を爲さず、謂へらく天理の二字を識得するは是

れ千聖の眞訣言語文字を以て承當すべきに非ず、唯是れ自ら欺かざるより始まる
と、道を以て自ら任ずる者四十年、年愈老て徳愈高く、業を問ふ者日に進む、湯斌、耿介
其の高弟なり、海内仰て之を宗とす、康熙十四年四月卒す、年九十有二、夏峰は世の朱
陸異同を辨ずる者の本に反へるを知らざるを病み、理學宗傳を著はし、一派に偏す
べからざるの意を示せり、吾人は夏峰を以て朱陸折衷家として之を取る、而して湯
斌も亦た師風を守れり、(上同)

劉伯繩——劉洵、字は伯繩、清介力行を以て稱せらる、念臺の子なり、念臺家居講學
の時に方て、諸弟子教を聞て未だ達せず、多く伯繩に私す、伯繩機に應じて開譬す、聞
く者灑然たらざるはなし、念臺國難に死するに及て、明の唐魯二王皆な使を遣はし
て祭り、且つ蔭するに官を以てす、伯繩之を辭して曰く、父の死敢て利を爲すに因ら
んやと、既に葬て門を杜き人事を絶ち、禮經考次一書を著はし、以て父の業を竟ふ、賤
山小樓に居ること二十年、與に接する所は史子虛、惲仲升輩數人のみ、或は講會を舉
るを勸るも應ぜず、卒に臨て其子を戒て曰く、汝等貧に安じて書を讀み人譜を守り

以て身を終へば足れりと、門人私謚して貞孝先生と曰へり、人譜は念臺の著はす所
の書なり、(同卷二八)

湯潛庵——湯斌、字は孔伯、荆峴と號し、晩に潛庵と號す、官、禮部尙書に至る、康熙二
十六年、九月卒す、年六十一、文正と謚す、潛庵先生遺稿等あり、潛庵は孫夏峰の高弟に
して古來の諸派を折衷する者なれば、其の學派甚だ明かならず、陸王學者は之を陸
王派と爲し、程朱學者は之を程朱派と爲す、潛庵の遺著に徴するも、朱陸調和主義た
るが如し、而して其の事功學問共に一世に卓出し、名臣醇儒と稱せられたり、(同卷五)

萬充宗——萬斯大、字は充宗、別字は謁夫、鄞縣の人、黃梨洲に従て學び、科擧の學を
爲さず、經に通するを以て己が任と爲す、獨り能く自ら門戸を開き、先儒の成見に附
會するを肯んぜず、海内の巨儒皆す敬禮を加ふ、斯大は質直和易、好て賢豪を納れ、後
進を奨引す、之と處る者相得て懽然たらざるはなし、嘗て杭州玉龍山に遊び、勳賢祠
に入り、陽明の像を拜謁し、東廡に張縉彦の神位なるを見て、之を擊碎せり、康熙二十
二年、七月卒す、年五十有一、斯大は黎州の門に出て、王學を奉じ、經學を治めて尤も

春秋三禮に精しく著述亦多し(同卷三)

萬石園——萬斯同、字は季野、石園と號す、斯大の弟なり、兄と俱に業を黃梨洲に受く、是に於て慎獨を以て主と爲し、聖賢を以て必ず及ぶべしと爲す、最も史學に長じ、著述頗る多し、當時王公より以て士に至るまで稱して萬先生と曰はざる者なく、閩百詩、顧寧人と並稱せらる、石園行清くして氣和かなり、人と交る久して愛敬すべし、意氣を務めず、聲援を事とせず、尤も喜て後進を奨引し、唯之を失はんことを恐れ、講習中に於て倦々三たび意を致せり、蓋し躬行の君子にして、黎洲の高弟たるに恥ぢざるなり、康熙四十一年四月卒す、年六十、門人私謚して文貞と曰ふ(上同)

沈求如——陽明の同邑にして其學を傳へし者、徐曰仁、錢緒山、胡今山、聞人邦正を推す、再傳して沈國模を得たり、國模字は、求如、餘姚の諸生たり、少より明道を以て己が任と爲す、嘗て蕺山劉子に從て證人社に會講し、歸て姚江書院を開き、史子虛、管霞標輩と與もに良知の説を申明す、其の學ぶ所或は以て禪に近しと爲す、而も言行敦潔、較然其志を欺かず、故に推して醇儒と爲す、明の亡ぶるや、劉念臺、絕粒して死する

を開き、之を哭して慟す、已にして講學益勤む、順治十三年卒す、年八十有二(同卷二)

史孝感——史子虛、字は孝感、餘姚の人、沈求如に繼て姚江書院を主る、嘗て曰く、空談は易く、境に對するは難し、居處恭、執事敬、與人忠の三語に於て精察して之を力行せば、其れ庶幾らんかと、家貧なるも意とせず、醇潔の士多く之に歸す、卒年七十有八、順治十六年なり(上同)

管宗聖——霞標と號す、餘姚の人、良知の學を奉ず、人と爲り孝友忠亮、靈氣自ら克ち言動必ず禮に準ず、郷人之に化せり、少保孫鑛始め霞標と與に文字の交を爲す、既にして從て聖學を講じ、喟然として嘆じて曰く、向きに嗜て左國秦漢百家の書を讀みしも、先生我が爲に洗ひ盡くせりと、鑛は世に所謂月峰先生なり、沈史二子没してより、後ち書院講を輟ること十年にして、縣人韓當之を繼げり(上同)

韓仁父——韓當、字は仁父、沈求如の弟子なり、其學は諸儒を兼綜して、儒佛の辨に兢兢たり、貧に居て未だ嘗て人に向て稱貸せず、毎に言ふ、立身必自節用始は、陸梭山の居家制用篇に出づと、學徒に授て曰く、能く此に仿ふも亦自ら用ふるに足る、何ぞ

更に外に求るを爲さんと、講に臨ては必ず默對良久して始て語を發す、聞者輒ち内に媿て汗下る、退て相語て曰く韓先生に從て覺えず自失せりと、(上同)

邵子唯

邵曹可、字は子唯、性孝友愷悌、少より頗る書畫を好む、一日孟子を讀み

伯夷は聖之清者也に至て遂に渙然釋て去る、初め姚江書院を立てし時、人頗る迂として之を笑ふ、子唯、色を勵まして曰く、是の如くならずんば便ち虚く此生を度らんと、遂に往て學ぶ、同儕の業を請ふ者、辨難多し、子唯獨り默然として日を竟ふ、初め主敬を以て學と爲す、後ち専ら致知を提げ、子虚に師事し甚だ謹む、卒年五十有一、子唯、貞顯を生む、字は鶴間、鶴間、廷采を生む、字は允斯、又の字は念魯、學者念魯先生と稱す、初め祖父、其志あるを見て之を姚江書院に送る、是時、求如先生年八十、歳に必ず一再書院に至り諸生の爲に講を設く、念魯階下に立て聽き之を久して卷を執て請て曰く、孩提不學不慮と堯舜不思不勉と同じか、求如嘆して曰く、孺子良知を知る、能く敬以て恕せば吾れ何ぞ加へんと、是より韓當に從て業を受く、初め傳習録を讀むも得る所なし、既にして劉念臺の人譜を讀て曰く善哉吾れ王氏の學を治る者の始むべ

き所の事を知れりと、古書を讀み古禮を守る、是時に當て姚江書院の諸先生相次て歿し、念魯遺書を荒江斥海の濱に抱き、其師説を守て變せず、然れども貧にして自ら存するなし、嘉興に走て童子に誅し自ら給す、居ること數年施博なる者あり、與に學を放鶴洲に論ず、念魯曰く天泉四言は陽明、無極の説に本つけるは儒なり、龍溪、無生の旨に浸淫するは釋なり、彼を以て此を病しむるを得ずと、博肅拜して曰く博や老いたり、惟た吾子正學を崇尚す、幸に自愛せよと、蓋吾の李剛主、書を貽て明儒の同異を論ず、念魯答て曰く良知を致す者は誠意を主とす、陽明以後劉蕺山を願學すと、其自信此の如し、初め侍郎孫承澤、相國熊賜履先後王氏の學を聞くを以て己が任と爲し、朝野の士譁然之に從ふ、念魯曰く是れ與もに辨するに足らず、願て力行に在るのみ、姚江書院を修繕し禮幣を用ふ、康熙五十年卒す、年六十有四、其著は王子傳、劉子蕺山傳、王門弟子傳、劉門弟子傳、姚江書院傳等及び思復堂集二十卷、又た姚江書院志略凡四卷あり、(上同)

王金如

王朝式、字は金如、山陰の人、沈求如の弟子なり、嘗て證人社に入る、劉念

臺は誠意君守致知を主とせり、曰く、學は良知より入るにあらずんば必ず誠とする所に非るを誠とするの蔽あらん、念臺其志願大にして骨力堅きを稱せり、崇禎の末、浙江大に饑ゆ、金如、賑粟を倡へ、全活甚だ多し、時に天下大に亂る、將に四方に走て奇傑の士を求め、治安戰守の策を謀らんと欲して、行を果さず、順治の初卒す、年三十有八、(同上)

於_文那_に於_{ける} **王學者一覽表并頁數**

(五十音順)

イの部		力の部	
殷秋溟、邁	三九五	王金如、朝式	四一五
尤西川、時熙	三九五	韓仁父、當	四一三
オの部 (ヲウウ)		何善山、廷仁	三三三
歐陽南野、德	三三六	何心隱	三六九
王龍溪、畿	三三二	夏廷美	三七〇
王一菴、棟	三七一	何克齋、祥	三七五
王陽明、守仁	二	顏山農	三六八
王東崖、襲	三六九	夏良勝	
王心齋、良	三三一	王舜鵬	三六〇
		王順渠、道	三六四
		王柳川、釗	三五八
		王塘南、時槐	三七七
		王敬所、宗沐	三七四
		王學益	
		王文轅	三一七
		王陽昱	
		王正心	
		王激	
		夏復吾、醇	三六〇

韓樂吾	三七〇	クの部	胡今山、瀚	三五四	
キの部		管霞標、宗聖	四一三	黃洛村、宏綱	三三四
許敬菴、孚遠	三八七	管石屏、州	三五九	黃黎洲、宗羲	四〇六
魏藥湖、良器	三四五	管東溟、志道	三九三	黃致齋、宗明	三三九
魏師伊、良政	三四四	郭持平		黃久庵、綰	三三八
魏水洲、良弼	三四四	郭慶		黃五岳、省曾	三三六
季彭山、本	三三七	コの部 (カワウ)		黃鶴溪、嘉愛	三六〇
姜廷善、寶	三九一	顧箬溪、應祥	三四八	黃吳南、文煥	三六〇
冀闇齋、元亨	三四〇	耿天臺、定向	三九二	黃德良、驥	三六〇
魏廷豹		耿楚侗、定理	三九三	黃丁山、元釜	三六〇
許半圭	三七一	胡廬山、直	三八四	黃後川、夔	三六〇
金克厚		貢受軒、安國	三七六	黃宗賢	

谷鐘秀		查毅齋、鐸	三六六	沈古林、寵	三七六
黃夢星		シの部		蔣道林、信	三四一
吳子金		徐波石、樾	三七〇	章孟泉、時鸞	三七三
吳倫		章本清、潢	三七三	周謙齋、坦	三七七
吳仁		周積		周海門、汝登	三八二
吳鶴		徐魯源、用檢		朱白浦、節	三二〇
黃榕壇、道周	四〇五	朱光信、恕		朱恕	三七〇
黃槐密		蕭念渠、彥	三六七	徐橫山、愛	三一八
サの部		蕭拙齋、良幹	三六六	焦澹園、竝	三九八
蔡白石	三七三	周訥谿、怡	三七二	朱近齋、得之	三四四
柴後愚、鳳	三六〇	史孝感、子虛	四一三	周靜庵、衝	三四三
蔡我齋、宗克	三二〇	沈求如、國模	四二二	祝無功、世祿	三六五

徐存齋、階	三七九	鄒穎泉、善	三二九	薛畏齋、甲	三九六
舒梓溪	三六三	鄒東廓、守益	三二九	席元山	
鐘文奎		鄒瀘水、泳		邵子唯、曹	四一四
周汝員		鄒四山、溥		薛尙賢	三四六
周仲		鄒聚所、涵		薛宗鎧	
周魁		セの部		錢應揚	
蕭璆		錢緒山、德洪	三二四	薛僑	
周衝		薛中離、侃	三三一	饒文壁	
諸僞		戚竹坡、袞	三六七	錢大經	
周于德		戚南元、賢	三五七	薛俊	
スの部		聶雙江、豹	三三五	ソの部	
鄒南臯、元標	四〇〇	薛方山、應旂		孫夏峰、奇逢	四〇九

宋望之、儀望	三七九	張寔		董蘿石、澧	三四二
孫蒙泉、應奎	三六〇	テの部		董碩甫、穀	三四三
曾忬		鄭景明、燭	三七二	鄧定宇、以讚	
チの部		程松溪、文德	三五六	鄧大湖	三六九
陳蒙山、嘉謨	三七八	鄭朝朔	三四七	唐荆川、順之	三九〇
張陽和、元忬	三六六	程子木、默	三五六	唐凝菴、鶴徵	三九一
張浮峰、元冲	三四八	程心泉、大賓	三六八	陶石簣、望齡	三八三
陳明水、九川	三三一	鄭寅		鄧潛谷、元錫	三八六
張本清、棨	三七五	鄭驕		唐堯臣	
趙大洲、貞吉	三七四	トの部		唐愈賢	
張宏山、後覺	三九九	湯潛庵、斌	四二一	唐一菴、樞	三八六
陳稷		ナの部			

南瑞泉、大吉	三二七	ヒの部	孟雲浦、化鯉	三九六
ハの部		馮少墟、從吾、	孟我疆、秋	三九五
萬充宗、斯大	四一一	馮南江、恩	ユの部	
萬石園、斯同	四一二	馮慕岡、應京	俞大本	
萬思默、廷言	三七六	フの部	ヨの部(ヤウ)	
萬鹿園、表	三九一	聞人北江、詮	楊仕德	三四六
范牛野、引年	三五九	ホの部(ハフウ)	楊幼殷、豫孫	
潘雪松、士藻	三九三	方西樵、獻夫、	楊仕鳴	三四六
馬子莘	三四九	方本菴、學漸	楊晋庵、東明	三九八
范栗齋、瑾	三五九	穆元庵、孔暉	楊復所、起元	三八四
梅宛溪、守德	三六七	モの部(マウ)	姚鳳麓、汝循	三八五
萬潮		孟源	楊紹芳	

楊珂		劉觀時	李二曲、頤	四〇八
楊汝榮		劉晴川、魁	劉伯繩、洵	四一〇
ラの部		陸原靜、澄	倫彦式、以訓	
羅近溪、汝芳	三七九	李卓吾	劉道	
羅念菴、洪先	三六一	劉瀘瀟、元卿	劉魯	
羅匡湖、大紘	三八九	劉師泉、邦采	林達	
リの部		劉三五、陽	口の部	
梁日孚	三四七	劉兩峰、文敏	鹿乾岳、善繼、	三九九
林東城、春	三七一	劉梅源、曉	(以上)	
梁心隱	三六九	劉印山、秉監		
李見羅、材	三七二	倫以諒		
劉冲倩、塙	三九七	劉念臺、宗周、		

陽明學新論附錄終

明治三十九年八月一日印刷
明治三十九年八月五日發行

(陽明學新論與附)

定價金壹圓參拾錢

著者

東京市本郷區森川町一番地

高瀬 武次郎

發行者

東京市日本橋區鐵砲町三番地

榊原 友吉

印刷者

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

石川 金太郎

印刷所

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

株式會社 秀英舍



東京市日本橋區鐵砲町三番地

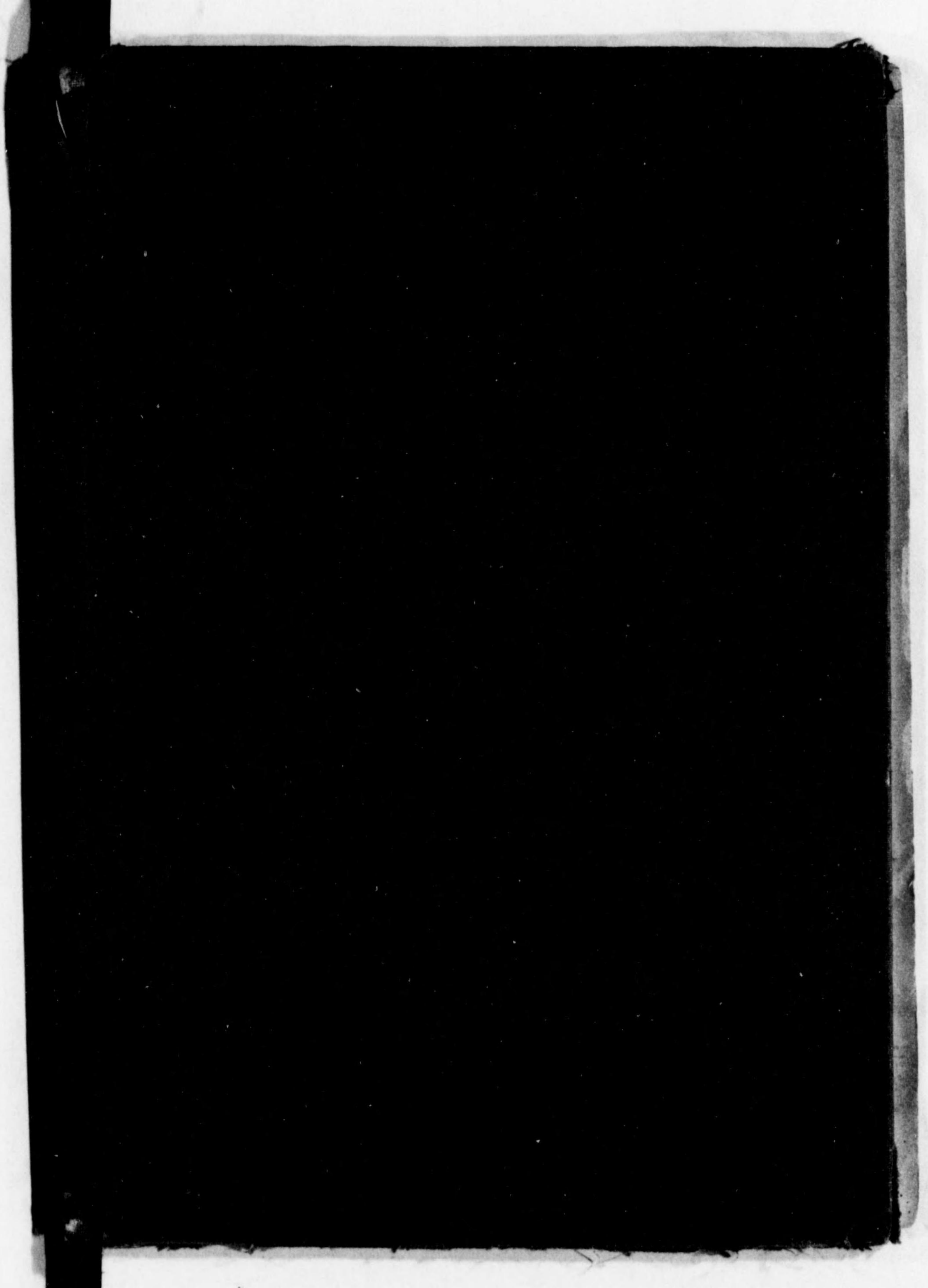
圖書專賣所

榊原文盛堂

明治圖書株式會社
合資會社六盟館

(電話浪花三三三三)(電略〇卜毛)





40
706

Ⓜ

008321-000-5

40-706

陽明学新論

高瀬 武次郎/著

M39

AAC-0268





大學博士高濂武次郎著

陽明學新論

東京 神原文盛堂發行

10-0-6
内交